

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名 朱 棟文

本研究は、近年国内外で流行の兆しを見せている土木構造物を対象とする観光体験（インフラツーリズム）に着目し、インフラツーリズムの特質とは観光体験と景観認識の融合であるという立場から、鍵となる概念である「ツーリストランドスケープ（観光景観体験）」の特徴を、オンラインでの User Generated Contents の分析を主に、現地におけるツーリストへのヒアリングを補助的に用いつつ、実証的に考察したものである。

第1章では、近年インフラストラクチャー（土木構造物）を対象とするツーリズムが一般化しつつあり、またインフラツーリズムに関する研究も少しずつ増加しているなかで、実践的な知見がまだまだ未整備であることが述べられている。そのうえで、研究の目標を観光と景観の統合体験である「ツーリスト・ランドスケープ」の体系的理解に定め、とくに調査対象を大規模インフラ構造物に限定して、ツーリストがどのような内容をどのように体験するかを明らかにすること、を具体の研究目的として設定している。

第2章は、本研究におけるツーリスト・ランドスケープの理論的枠組みを、既往研究の成果を援用して示している。とくに本研究で景観文化価値モデル（CVM）を用いることの有用性を論じつつ、Form, Practice, Relationship という三つの景観価値の側面から、インフラツーリストの観光体験・景観認知を記述することを述べている。

第3章は、方法論と分析手法の解説に充てられている。さまざまな質的・量的分析方法があるなかで、体験や認知を評価する材料としてテキストや画像を用いることの妥当性を示した上で、本研究ではオンラインによる UGC（User Generated Contents）情報（テキストと画像）を調査分析対象として用いる意図を述べている。さらに、研究サイトとして選定した明石海峡大橋、レインボーブリッジ、伊良部大橋、黒部ダム、萬代橋、永代橋について解説した上で、分析の具体手法について説明がなされている。

第4章は、調査と分析に充てられている。まず、分析対象として選定した各大規模インフラ構造物について、観光情報サイト TripAdvisor におけるユーザーのテキストレビューを抽出して、その内容を分析している。全体的な傾向、構造物種類間での比較、ユーザーの文化的背景による比較、構造物が位置する周辺環境の差異による比較などの分析を行い、次のような結果を示している。まず、Form、Practice、Relationship と

いう三つの景観価値を設定する景観文化価値モデル（CVM）の枠組みに基づいてインフラツーリズムにおける観光景観体験を記述することの有効性を確認した。なお、橋梁とダム双方とも、Practices と Images の価値が大きいという共通点がある。また橋梁の場合、形状によって景観価値の認識の傾向が異なる。橋梁の場合は構造物の要素が強く作用するが、ダムは自然的な要素がより強く作用し、橋梁に比して Image の景観価値が強くなる。また文化的背景の差異によって景観価値の認識が異なり、とくに中国人のグループは、橋梁構造物としての形状や要素、および構造物に付随する社会・文化的な意味を強く感じるとの傾向が見られ、一方日本人のグループは活動価値をより強く認識する傾向が見られた。さらに、構造物の周辺環境における自然的要素の多少に応じて、場所への意識が変化する傾向が見られた。

第5章では、前章におけるデータ分析の結果から、大規模橋梁構造物におけるツーリスト・ランドスケープの特性を次のように考察している。まず、大規模構造物におけるツーリスト・ランドスケープの体験は、主として当該構造物サイトにおける観光者の活動の価値に集中している。これは、近年におけるニューツーリズムの特徴と一致しているが、この活動価値が構造物自体の形状や機能から派生する点が、インフラツーリズムの大きな特性である。いわば、対象物が価値を構築するのである。また、構造物をとりまく景観および構造物の景観的調和は、観光者の場所に対する肯定的意識の形成に貢献し、また場所にたいする意識は、橋梁が有する社会文化的なすなわち意味的なシンボル性の強度に関係している。

第6章では結論として、インフラツーリズムにおけるツーリストランドスケープという理論的枠組みを導入することの意義、UGC 情報を用いたツーリストランドスケープの分析手法とその有用性の提示、大規模インフラ構造物における観光景観体験の特性の抽出、を本研究の成果として示している。

本研究では、いまだ学術的知見の蓄積が十分とは言えないインフラツーリズム分野の、とくに大規模な橋梁構造物のツーリズムを対象に、「ツーリスト・ランドスケープ」の理論的枠組みの有用性、観光者の主体的な活動の価値の重要性、構造物のイメージと場所のイメージが連動している可能性を指摘するなど、一定水準の分析・考察が示されており、わが国のインフラツーリズム黎明期における基礎的研究としての意義と有用性は高く評価できるものである。

よって本論文は、博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。